

## 暑い夏に思うこと

### ～人生のターニングポイントと環境～

ながれ

岸波 秀美 (きしなみ ひでみ/大学院生、元インターン生、東京都在住)

暑い夏。私にとって夏は、決意を定めて行動に移し始める季節である。

受験、留学の準備、就職活動など、人生の岐路に立たされ決断し、行動に移し始めるのはいつも夏だった。今回は、「環境分野に関わり続ける生き方をしたい」と思った私のこれまでの出来事や行動について綴らせて頂く。

私が環境に携わる仕事をしたいという意識を持ち始めたのは、中学校を卒業する頃からだ。

国語の文章読解問題で読んだ、人間活動による環境破壊の現状を知ったこと、また、歴史の授業で学んだ、レイチェル・カーソンの「沈黙の春」に感銘を受けたことをきっかけに、「自然を守る人になりたい」と将来の夢についての作文に綴った。当時の私は、「人間は自然と共生していくべきだ。物質的豊かさを追求して環境を破壊し続ける日本には居たくない。精神的豊かさを大切にしている途上国の方が幸せではないか。」といった考えを持っていた。

高校へ入学すると、途上国の中でもアフリカに行きたいという意識が高まり、アフリカ諸国での環境保全・食と農に関わる仕事をしたいと考えるようになった。当初は農学部の大学を目指していたものの叶わず、最終的にはアフリカ諸国と交換留学制度を持つ、某大学に入学した。

大学入学後は、アフリカに行くことを夢に見て、英語・フランス語・スワヒリ語の学習に努めた。2年生からは開発経済・環境経済学のゼミに所属し、SDGsの普及に向けて、国民、企業、政府はどのような行動を起こしていくべきか議論してきた。3年生の時には念

願だった交換留学を叶え、5か月間セネガルに滞在した。セネガルはアフリカの中でも経済成長中の国であり、生活のいたるところで、日本の昭和時代を思い起こさせるような風景を目にした。しかし、その風景は良くも悪くもだった。良い点としては、家族やご近所づきあいを大切にしている、子供たちがたくさんいて、若者たちも勤勉。全体としてハンタリー精神を国民から感じられた。悪い点としては、環境汚染という概念が抜け落ちた世界観である。具体的には、道端でゴミを燃やす人、真っ黒な排気ガスをあげながら走る車、プラスチックゴミのポイ捨て、ゴミで溢れる川、洗剤の混じった水の垂れ流しなどである。これまで大学内の議論で、「途上国であっても、環境と経済を両立していくべきだ」と軽々しく口にしていた私にとって、これらの風景は煉瓦で頭を打たれたようなひどい衝撃だった。この経験を通し、「現場で活躍できる知識をつけたい。自分の行動がちっぽけなものでも何か環境問題に携わる人生でありたい。」と考え方が変わった。帰国後は環境関連のあらゆる授業を取り、その中で、人間の活動や開発事業による環境影響を分析できるようになりたいと思うようになった。そして、環境を科学的に解析するため、高校時代に志していた理系の大学院進学を決意した。大学院進学決意後、ゼミ以外の環境に携わる活動をしていなかった自分を見つめなおし、インターン生として環境文明21の活動に参加させて頂いた。

そして、来年度からの某企業のカーボンニュートラル推進部への就職を控え、今年の夏は修士論文執筆に勤しむ決意である。